令和５年度　調査研究事業（研究報告）

１　施設名

小松保育園

２　研究テーマ

子どもが育つ保育の条件を学び、保育の質を高める

３　研究内容

（１）実施期間

令和5年4月～令和6年3月

（２）講師の所属・役職・氏名等

神戸コダーイ芸術教育研究所

小林純子

（３）研究のねらい

子どもの発達に合った保育環境を考え、実践し、主体的な遊びの発展につなげる

（４）研究対象児童

全園児

４　実践内容

① 当園では6年前より育児担当保育を導入し、従来の保育者主導の一斉型保育から年齢の特徴に合わせて室内環境を作り、遊びを通して発達を助け、気付きを大切にする保育の実践に取り組んできた。その中で以下の点について、より良く改善する為に講師に来ていただき園内研修を行うことにした。第1回目5月16日は以下の観点から各部屋を見ていただき、その後のミーティングで助言をいただいた。

・各クラスの環境は月齢や子どもの発達に沿っているか。
・子ども一人一人がやりたい事を選んでできるような環境構成になっているか。
・子ども一人一人の気持ちを尊重した関わりや子どもの実態、興味、関心に合わせて柔軟に変わっていける応答的な保育が実践されているか。

第2回目は10月6日、第3回目は2月8日に来ていただき、成長・発達に応じた環境の修正が行われているか、環境を変えたことで子どもの遊びがどう変化したか、更に次の課題は何か等丁寧に観察していくことを学んだ。

そして子どもの発達と環境についての基本的考え方を「乳児保育の実際」を参考図書とし、講師の助言もいただきながら学び直すことにした。

② 神戸コダーイ主催の他園公開保育に交代で参加し、実際に見せていただくことでより深く環境構成や保育士の子どもに対しての関わりを学ぶことができた。

5　研究のまとめ（研究成果）

講師からの助言
・月齢、年齢に合った環境作りをする。1歳児は動きたい、真似る、並行遊びの時期。
・子どもが何を楽しんでいるのかを観察して環境を作る
・寝食排泄の時間以外は全て遊べる時間と考え、それをどう保障していくのかを考える。
・基本の玩具は揃っているか。（布、ボール、人形、容器、絵本、車、積み木、粗大）
・玩具はどこに何があるのか分かりやすく置いておき「あそこにあるよ」と子どもに知らせる関わりが大切。
・子どもが考えることが出来る空間作りにする。それを促す助言を大人がする。←それが援助。
・大人が経験させたいことを決めて意図的に環境を作ることもあるが、その遊びを評価するのではなく日常の遊びを評価する。（大人が決めた環境を子どもが採用しない場合もある）

【講師の助言により改善した保育室】

・パーテーションを取り外してオープン空間にした。
・再現遊びの空間につながりを持たせた。
・構造遊びの空間を広く取った。
・「走る」のではなく動ける遊びのコーナーを設けた。
・再現模倣遊びをひとつの場所に設けた。

【研究の成果】
・落ち着いた環境作りの為にパーテーションを用いて生活空間を区切っていたが講師の助言により、それを取り除くことで禁止の言葉をかけることが無くなり、大人と子ども共に区切ることがかえってストレスになっていたことに気が付いた。保育室内に置く物は全て子どもが好きに触っても良い物にしておく事と、大人が子どもを信頼して肯定的な眼差しで遊びを見守る事の大切さをこの実践で学べた。私たち保育者が研修の中で改めて年齢と発達を学び合い、0歳、1歳、2歳児の姿を理解し、その姿に合った玩具や環境作りを意識したことで子ども達の動きや遊びが変化した事も驚く成果となった。

・講師の助言により、年齢・発達に合った玩具を購入する。
・汽車・木製レールの玩具は1歳児クラスでは大人が主導になって遊ばせることになる。握りやすい大きさの車を用意し、子どもが自由に走らせたり中腰で押して動かせたりするなどの身体運動も促す。
・同じものを多く用意しておく。（友達と同じことをしたい年齢なので）
・どこに何が入っているのか、子どもにも分かりやすい置き方。

6　課題

今回の課題で、各年齢の姿の理解と発達を踏まえた環境作り、そして遊びが保障された充分な時間があれば、子どもは発達の課題を自分で解決できるという事を学んだ。しかし、それを実践していく為には関わる大人が、子どもが何を楽しんでいるのかを見て理解し、その興味がどうやったら広がり深まっていくのかを考えたり、話し合ったりすることが大切だと感じた。今後も更に学びを深め取り組んで行きたい。

令和５年度　調査研究事業（研究報告）

１　施設名

みつばさ保育園

２　研究テーマ

「感性を研ぎ澄ます～モノ・空間・時間～」

３　研究内容

（１）実施期間

令和５年４月～令和６年３月

（２）講師の所属・役職・氏名等

キッズいわき・ぱふ　岩城敏之氏

子どもと育ち総合研究所　宍戸信子氏

（３）研究のねらい

保育環境をいろいろな角度からみつめ、多面的に考察します。子どもにとって、音、光、感触、時間などが五感を通して「身体の発達」「感性の発達」「認知の発達」にどのようにつながっていくのかについて研究します。

（４）研究対象児童

３歳児・４歳児・５歳児

４　実践内容

①職員と園児対象：おもちゃワークショップ「人と人・人とおもちゃ・環境と人・おもちゃと環境」相当的な関わりの中で感性や認知が複合的に育っていく
②職員対象：音のワークショップ「生活の中ある音」「音と体の動きの相関」「図形楽譜」
③５歳児対象：「言葉とリズム」「小さい音、大きな音、ならない音」を手拍子や楽器を使って表現してみる。
④３歳児対象：「体の動きと音、リズム」「名前とリズムで遊ぼう」
⑤４歳児対象：「耳をすまして聴いてみよう」音やリズムからイメージがひろがる。
⑥職員対象：おもちゃのワークショップ。おもちゃやゲームを通して子ども同士の遊びがつながっていく。思考の発達。

5　研究のまとめ（研究成果）

〃●感性の発達
　言葉以上に子どもに語り掛ける「環境（音・光・空間）」について、まずは大人が感じてみる。
▸生活の中にある音
　【家の中の音】足音、服がすれる音、扉の開け閉め、水道、時計、空気清浄機、スマホ着信音、冷蔵庫の冷却音、パソコン　キーボード、ドライヤー、排水の音
　【家の外の音】ゴミ収集車、トラック、自転車ベル、話し声、布団たたき、犬の鳴き声、シャッターなど。
▸目線の高さに合わせると…
　低いところには、魅力的なおもちゃや素材。高いところは落ち着く静かなモノ（観葉植物や天蓋、園児の作品などを飾る）。
　乳児は身体（体幹）を使いたい。寝返り→ずり這い→ハイハイ→つかまり立ち→あんよ→のぼる→ジャンプ→降りる→重いものを持って運ぶ→引きずる→押す…。これらの動作が日常的に体験できる空間づくり。
▸空間が持つ保育力
　広い・狭い・明るい・暗い・高い・低い・窓がある（ない）・冷たい床・ふわふわのクッション・静か・賑やか…
　どんな空間で過ごしてほしいのか？子どもの主体性と大人の主体性をミックスさせて環境構成をする。正解不正解はなく、日本の四季や日の出、日の入り、子どもの興味発達に合わせて、日々移ろい変化させるのが空間。

●感性が認知を育む
　「環境（音・光・空間）」と「子ども」と「大人」の応答的な関わりの中で認知が育まれていく。
▸図形楽譜の面白さ
　大きな音、小さな音、高い音、低い音。ながい音、短い音…。ロール紙に書いて表現してみる。その絵を見て、リズムを作ってみる→インプット（感性）とアウトプット（表現）
▸名前とリズム
「かおりちゃん」「ハーイ」
「そうくん」「♩　♩」
「さきちゃん」「♪ ♪ ♩」
感じたリズムを拍手や動きで表現してみる。
▸耳をすませる
音楽の中にある音階（ドレミファソラシド）に気づく

●感性や認知の育ちは「幸せに生きる力の土台」
▸幸せに生きる条件
自分の能力を十分に使うことで、人に感謝されたり喜ばせることができる環境で生きること。
応答的なかかわりの中でこそ自己が形成される。
子どもを大切にする。子どもに寄り添う。人格を尊重する。これらは「知識と技術」。
保育者の人格や心に依存すると、保育がくたびれる。コンスタントに子どもの権利を尊重するのは「知識と技術」。
「知識や技術の伝搬」には、コミュニケーションが何より大切。

6　課題

音やリズムは、日常に溢れているし、もっと言えば、日常生活の体の動きから運動遊びまで、全て体の動きは音とリズムに結びついている。新生児の「あーあー」に応答して母親が「あーあー」と応えるのもリズムと音。バットを構え、脱力で振り落とし、インパクトで力を込めてボールを打つのもリズム。音感やリズム感を育てることは、日常から切り離して学ぶモノではなく、子どもの動きそのものに音やリズムで応答し感じで楽しむところからすでに始まっている。園児の動きや言葉全ての表現に応答的に関わり、感性を磨くことが認知の深まりにつながる。

令和５年度　調査研究事業（研究報告）

１　施設名

せいあい保育園

２　研究テーマ

乳児の心と身体を促す遊びと環境

３　研究内容

（１）実施期間

令和5年4月～令和6年3月

（２）講師の所属・役職・氏名等

元難波愛の園幼稚園　菅澤順子先生・マザーリーフ　古川緑さん・
関西こどものとも　鈴木健司さん・関西学院短期大学　坂口将太先生・
１２７６座さん

（３）研究のねらい

0.1.2歳の乳児期に必要な愛着関係（保護者・保育者共に）を深められるような研修を行い、わらべうた・絵本・運動遊びなど豊かな遊びや関わりを通して、子どもたちの自己肯定感や基本的信頼感を育て、心と身体の発達を促す。

（４）研究対象児童

０、１、２歳の保育園児と保護者・保育士

４　実践内容

わらべうた講座　菅澤先生（年3回）
保育士向けの研修や子どもたちと一緒に遊びながらの研修も設けた。

絵本講座　　関西こどもの友社　鈴木さん
保育者向け・保護者向けの研修を行い、絵本に対する理解を深めた。
ベビーマッサージ講座　マザーリーフ古川さん
保育者向け・保護者向けを行い、子どもたちと愛着関係を深めた。
子どもの身体の発達講座　坂口先生（関西学院短期大学）
子どもの成長に合わせた生活用品の使い方などの研修

講演会　誕生教育劇団１２７６座

5　研究のまとめ（研究成果）

わらべうたの研修では、保育時間中に子どもたちと一緒に行うことで反応を見て感じながら常勤・非常勤にかかわらずみんなの保育士が学べる機会を持つことが出来た。先生たちも意識して取り組んだことで、歌やわらべうた・絵本が好きな子どもが増え、家でも保護者と共に絵本を楽しむ子どもが増えているように思う。

０歳児のまだ言葉が少ない子どもたちでも「わらべうたえほん」の中で自分の好きなページを開き、「これ歌って！」というように持ってきてくれるようになった。みんなのお気に入りの絵本になり、園からのクリスマスマプレゼントにしたことで、さらにお家でも楽しんでくれているようだ。

フィックタイルズという約３０㎝四方のパズル状に組み合わせ出来る運動遊びの遊具を購入し、必ず通る廊下に設置したことで親子で楽しみながらその上を歩いている。石・木・貝殻など自然素材を使った型で製作されているため、様々な足の感覚を味わい、足育に繋がった。一時的なもので長く置いておくと飽きるかと思われたが、毎日の習慣になっている子も多くいて良かった。また、隣接する聖愛幼稚園の子どもたちも利用し楽しむ姿が見られた。

新しく購入させて頂いた椅子は、足置き板が上下に３段階、座板は前後に４段階調節可能なので細かく調節できるので正しい姿勢が保てるようになっている。背板と座板の角度は９０度に設定され、しっかりと足裏全体がつくように広い足置き板になっているので、0歳児のクラスで活用し、子どもたちも落ち着いて食事を楽しんでいた。

それ以外にもお風呂マットをカットしてイスの座面の高さと足がつく高さに一人一人合わせて、正しい姿勢で食事が出来るように取り組んだ。成長に合わせて、その都度足の置く高さを変更した。

保育士向けのベビーマッサージの講座では、０歳児・１歳児クラスの子ども全員とほぼ全員の保育士が経験し、心通わせる・触れることの良さを再確認し、子どもたちも喜んでいて、さらに愛着関係が形成されたように思う。

保護者向けへのプログラムでは絵本講座・ベビーマッサージ・１２７６座講演会と様々なものを実施し、参加していただいた。いろんな方面から乳児に合わせた内容を検討したがおおむね好評だった。保護者の方々にも忙しい毎日の中でも、子どもたちと少しの時間でも向き合うことの大切さを感じていただけたのではないかと思う。

6　課題

わらべうたの研修を繰り返し行うことで、覚えてレパートリーが増え、しばらくは教えて頂いたものを楽しむものの継続して実践が出来ていないときもあるので、意識しながら取り組んでいきたい。

保護者向けに子どもと楽しく触れ合う機会を多く持ってもらい、愛着形成に繋げてもらいたいとベビーマッサージ講座を行ったが、０歳児クラスの時から積み重ねたらもっと良くなるのではと思ったので、来年度も引き続き、取り組めるように検討したい。
室内での運動遊具で購入したプレイキューブの遊具が海外での受注生産だった為に納品が遅くなり、今年度は十分に活用することが出来なかったので、来年度は活用させていきたい。

令和５年度　調査研究事業（研究報告）

１　施設名

大国保育園

２　研究テーマ

すべての子どもの豊かな表現と多様性

３　研究内容

（１）実施期間

令和5年4月～令和6年3月

（２）講師の所属・役職・氏名等

岩部紘明さん（株式会社YELL)、谷本直也さん（太鼓集団　怒）

横沢道治さん（タムタムカンパニー）、華雪さん（書道家）

（３）研究のねらい

すべての子どもが多様な文化や人と出会うことにより自己の表現を豊かに多様化させ、画一的な価値ではなく、自ら自然と湧き出る意欲をベースにした思考力・判断に自信を持ち、自然と学びに向かう姿勢とさらなる意欲を引き出す教育の本質と思想への挑戦

（４）研究対象児童

社会福祉法人石井記念愛染園　大国保育園　園児（０～５歳児）

４　実践内容

１、カプラ　ワークショップ（全5回）
カプラでの構成遊びを通じた自由な発想と論理的思考の育成及び異年齢保育による育ち合い
２、和太鼓ワークショップと人権
～私たちの育った町に誇りを～
（前期2回・後期2回）
浪速区の文化である皮革産業について学び、和太鼓演奏を通じて自分自身と自分の育った町に誇りを持つ
３、多文化理解と共生
西アフリカの楽器であるジェンベのプロ奏者を招き、異文化について楽しく学び、体全体を使う自由な表現による自己解放と国籍の異なる友だちとの理解を図る
４、書のワークショップ（教育の本質と思想）
書道家である華雪さんを招き、文字の成り立ちを自然から学び、大人が主導の教えられる教育ではなく、主体的な学びの土台を育む

5　研究のまとめ（研究成果）

１、本物との出会い
「カプラの講師」・「和太鼓奏者」・「ジェンベ奏者」・「書道家」という各分野のプロフェッショナルと子どもが出会う（人的環境）ことにより、いま社会にある画一的な価値観とは違う、自由で多様な表現（物的・空間的環境）に触れ、心から楽しむ経験をすることにより、自然と湧き出る子どもの意欲と主体性を大切に考えた。
２、カプラワークショップ
第1回、３歳児がカプラの基本的な遊び方を知り、構成遊びに取り組む。第2回、４歳児、第3回、５歳児がテーマ「まち」を設定して取り組む。講師によるワークショップということもあり、遊びの幅に広がりが見られる。他クラスが取り組んでいる間は、想像力を持って観察し集中して楽しむ姿が見られた。その遊び方や構成力などの表現は、これまでとは違い、単に積み上げるだけではなく多様な思考の高まりが見られた。平面的な構成から立体的に空間を捉える子どもの姿やテーマを設定したことにより、考えを言語化して協力する姿が散見された。第4・5回は、４・５歳児混合の２グループに分かれて異年齢による活動を実施。子どもたちは、話し合いながら自分たちの町（大国町）を作った。
３、和太鼓ワークショップ
５歳児が自分たちの暮らす町・浪速区の文化である皮革産業と太鼓について知り、太鼓集団怒から講師を招き、前期、後期全４回のWSを行った。その成果は、運動会で園児や保護者が見守る中、演奏を発表した。和太鼓は、人権を学ぶ機会としても捉え、自分だけではなく周りにいる人の大切さを知る機会にもなった。自分だけの表現ではなく、みんなで合わせることを達成したときの満足感は自信につながった。この活動は、いまを生きることと合わせて、将来、この町に育ってよかったという誇りにつながることを目指し、差別や偏見をこの社会から無くすことにもつながると考えている。
４、多文化理解と共生
保育園には多国籍の家族がいる。今回は西アフリカの文化を学ぶために西アフリカの打楽器ジェンベの奏者を招き、絵本と音楽を通じて異文化を感じ、学ぶ機会を設けた。和太鼓とは違う形状であるが動物の皮と木からできている共通点を知る。また、太鼓は動植物の生命をいただくことにより演奏できるということを学んだ。０～５歳児の子どもは、リズムに合わせて自然と体が動き出し、自由に音を楽しむという音楽の本質に触れる経験をした。また、保育士にとっても固定観念にとらわれない自由な発想への刺激が得られた。「みんな違ってみんないい」という標語はよく使われるが、現在もさまざまな違いに対する偏見や差別がなくなったとは言えない。このような活動を通じて違いを隔たりとしてではなく、喜びとして認めることのできる社会をめざし、種をまく活動を続ける意義を感じた。
５、書のワークショップ
書道家を招き書のWSを行った。木という漢字の成り立ちを絵と象形文字から知り、子どもは園庭にある木の中で好きな木を選び、触り、感じることから始めた。その後、書道家が木という漢字を書く。子どもは、書道家のエネルギーやオーラに驚きを覚えたが、すぐにそれは尊敬に変容した。子どもの感性は豊かで、学校教育とは全く違う形で豊かな学びを経験をした。最後に10mの段ボール紙に世界に一つだけの木を自由に描き、それが集まると子どもたちがつくった森が完成。保育士は、WSから豊かな遊びの環境について深く学んだ。

6　課題

子どもたちは「本物：各分野のプロフェッショナル」と出会うことにより、持ち前の感性で一人ひとりが表現を楽しむことができた。また、活動を通し、自然な形で子どもが周囲と協同する姿が見られたことは大きな成果であり、一つひとつの出会いと経験はかけがえのないものとなった。しかし、課題としては、すべての活動を「連続性を持ったつながりのある活動」として実践できていただろうかという点が挙げられる。
それぞれの分野のプロからの学びは、その人（専門性・個性・人間性）からしか学ぶことのできない豊かな内容（豊かな表現・多様性・人権）であり、人的・物的・空間的環境について「多様性を認め合える環境づくり」に多大な示唆をいただいた。ただ、一つ課題を挙げると研究者等の協力も得ながら理論的にその効果をまとめることができるとさらにより理解が深まったのではないかと考える。

令和５年度　調査研究事業（研究報告）

１　施設名

大阪市立豊里第2保育所

２　研究テーマ

造形・絵画活動を中心に日々の生活の中で多様な経験を通して心と体を豊かにし、人・物・事との繋がりを深めながら自分の世界を広げる力を養う

３　研究内容

（１）実施期間

令和5年4月～令和6年3月

（２）講師の所属・役職・氏名等

造形教室・所長・村田夕紀先生

（３）研究のねらい

1, 色々な素材に触れ親しみ体感する中で自分なりの表現を見つけて楽しむ
2, ものを介して人と関わり子ども同士でコミュニケーションを持てる等、これらを大切にし自ら表現に向かう「自主性」と人と関わる「社会性」を育てる

（４）研究対象児童

全児童

４　実践内容

１, 実践日10日位前に造形保育案を立て、先生に提出し確認して頂き気付きを記入して頂き変装してもらい実践に活かします
２，当日9時から先生と一緒に準備に当たり9時30分頃から12時頃まで0歳児クラスから5歳児クラスまで入っていただき、導入から言葉がけまでの子どもと関わっていただき、その様子を学ぶ
３，12時30分ごろからクラスから1名参加し全体で動画を見ながら評価反省・指導を受ける
４，次回の取り組みについて一緒に検討して頂き準備について確認する
５，今年度初めての作品展示会を行い保護者に参観して頂く機会を設ける

5　研究のまとめ（研究成果）

●初めの頃は、上手に表現表現する事が苦手な子どもが沢山いて、とても雑な活動になっていたり、表現できない子がとても多かったり、5歳児で頭足人しか表現出来ていなかった
先生に来ていただく事で職員自身が造形活動に対しての意識が高まり、道具の使用の仕方や技法・導入の仕方や言葉がけを学び取り組めるようになった事でこれまでの迷いがなくなり子どもと一緒に貝が造形を楽しめるようになったことは大きな成果となった。
●職員が変わると子ども達にもすぐに変化が見られるようになり、今まで描けなかった子がのびのびと描くようになり、自由に工夫して楽しむ姿が見られるようになった。
全体で造形の日が楽しみになり、様々な取り組みを嫌がる子どもが誰一人としていなかったことが一番の成果だと思った。
●今年度初めての取り組みとして、作品展示会を開催し親子で参観して頂いた。
一つとして同じものがないところに個性を実感し、みんなと違う事に気付き自分を認識し、個性として自分らしさを見つける事で自主性が生まれ、その中で自己肯定感を育み自分とは違うお友だちの作品も認められるようになり社会性が育まれる事を見て頂けた事も大きな成果だと思う。

6　課題

職員自身が身に付き、子ども達の発達・年齢・興味・関心に合った取り組みが出来るようになる事を目標に引き続き取り組みたい。